

第 81 回 JIA アーバントリップ

テーマ **新緑の軽井沢へ** ～ 自然の中にたたずみ、自然を楽しむ名建築を巡る ～

実施日 2016 年(平成 28 年)6 月 13 日(月曜日)

見学主旨

81 回アーバントリップは軽井沢を巡る見学を計画した。

軽井沢は明治中期、一人の外国人宣教師が初めて別荘を建築したことから始まり、長く落ち着いた別荘地として発展してきた。

時代が進み、現在では多くの若者が自然を楽しむ 人気観光地となっている。

1962 年、アントニン・レーモンド夫妻が、自分たちのために新スタジオを建て、1973 年にレーモンドがアメリカに帰る時に、当時、事務所の所員であって、現在の所有者でもある 北澤興一さんが譲り受け、その時のままにアトリエとして、使用されている。その内部を見学して、さらにレーモンドと過ごした時代のことをお話し頂く。北野建設軽井沢営業所は吉村順三設計事務所の作品で、別荘の雰囲気を持つ建物を感じながら、建設の経緯などを聴く。

対照的に、昨年建設された個人所有の別荘、Y 邸を見学し、坂倉建築研究所 が「透明感のある2階の LDK は 林に浮かぶ大空間」と言っている、まさに自然を楽しむ現代の別荘を実感出来るはずだ。

最後に、現在観光客も多く訪れる 千住博美術館 を見学する。

決して大きな敷地とはいええない環境の中に、「緑の中の開かれた美術館」を実現している。

見学施設

1. 北澤アトリエ(旧レーモンド 軽井沢の新スタジオ)

住所:長野県北佐久郡軽井沢町

竣工:1962 年

設計:アントニン・レーモンド

案内:北澤興一(北澤建築設計事務所)

北澤アトリエ(旧レーモンド軽井沢の新スタジオ)



2. 北野建設軽井沢支店

住所:長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢旧軽井沢 472-7

竣工:1978 年 7 月

設計:吉村順三/大野 寛(吉村順三設計事務所)

案内:北野建設株式会社

3. Y 邸

住所:長野県北佐久郡軽井沢町

竣工:2015 年 9 月

設計:坂倉竹之助/吉田智重/柴田裕輔(坂倉建築研究所)

案内:吉田智重(坂倉建築研究所)



4. 千住博美術館

住所:長野県北佐久郡軽井沢町長倉 815

竣工:2011 年 1 月

設計:西沢立衛(西沢立衛建築設計事務所)

案内:松井元靖(西沢立衛建築設計事務所)



北野建設軽井沢支店



Y邸

室内撮影は禁止、2階バルコニーから見た庭の緑が美しい



千住博美術館

室内撮影は禁止、緑の中の美術館



「新緑の軽井沢へ」

変わる軽井沢、変わらない軽井沢

軽井沢と聞くと、冷静ではられない。6月13日「新緑の軽井沢へ～自然の中にたたずみ、自然を楽しむ名建築を巡る～」との誘いにひかれ、第81回アーバントリップ見学会に参加した。訪ねたのは2つの別荘、建設会社支店、私立美術館の計4カ所。

軽井沢町長倉にある「北澤アトリエ」は1962年竣工のレーモンド設計の「軽井沢新アトリエ（軽井沢スタジオ）」。「現所有者の北澤興一さんは、1961年から71年の間、レーモンドの事務所に勤務。毎年レーモンドは7月の第一金曜日から9月の第一金曜日まで、スタッフ3人のみをとめない軽井沢で過ごした。北澤さんは、在籍中毎年この軽井沢スタッフに選ばれ、誇らしかった。1972年にレーモンドがアメリカに去る際、「月5万円の給料なのに3100万円を買った」そう。後日、レーモンド事務所はアルバイト自由で、独立資金として貯めていたものをあてたと聞いた。「葉山の海の家は、壊さないとの約束で売られて3ヵ月で解体された。1933年竣工のレーモンド旧夏の家は、塩沢湖畔に移築されて現在「ペイネ美術館」になっているが、南北逆で周辺環境までは再現されていない」と北澤さん。「軽井沢に別荘を構えた文学者や美術家などの資料が散逸の危機にある。軽井沢町は、収集、公開に努めるべき」と訴える。近年、茅葺屋根が維持できず、茅を下ろしてしまっただが、内部は50年前のまま。できるだけ維持し、求められれば見学者も迎え入れたいと言う。

南ヶ丘のY邸は、坂倉建築研究所の設計。会長の坂倉竹之助氏と若いスタッフ2人が担当した。その一人吉田智重氏の案内で見せてもらった。昨年9月完成の個人宅であるにもかかわらず、大勢の見学者を受け入れてもらったことに感謝したい。アーバントリップ委員会の尽力に加え、設計事務所とクライアントの信頼関係があったからこそだ。

Y邸設計に当たっては、「非日常性と浮遊感を大事にした」という。総工費数億円と思われる。軽井沢に別荘を持つ意味が何か大きく変わってきていると感じた。

旧軽井沢の「北野建設軽井沢支店」は、長野で名高い建設会社の社屋。1978年、吉村順三設計事務所の設計で吉村順三70歳の時。かなりの部分を故・大野寛氏が設計していたらしいが、3段の段差や天井の高さで空間をかたちづくっていく手法はレーモンド軽井沢スタジオと共通点が見出せて興味深い。

レーモンドアトリエに近い長倉の西沢立衛氏設計の「軽井沢千住博美術館」。西沢立衛建築設計事務所の松井元靖氏が案内・解説してくれた。コンクリートの床がうねるように傾斜しており、上から見てところどころ穴が開いていて、植物が植わっている。森の中を歩くようにして見る美術館なのだ。通信教育「ユーキャン」の会長が、滝の絵で知られる日本画家千住博氏作品のコレクターで、財団法人立の美術館をつくることになった。西沢立衛氏は、千住博氏の紹介らしい。個人が個人の美術館をつくる。作家が一人だけの美術館だからこそできた空間だ。

ただ、重要な要素を占める植物だが、軽井沢をテーマとした詩や文学に登場するものとは異なり、オーストラリアの植物を使うなど、現代的なガーデニングとなっている。50年、100年経つてはじめてこれも軽井沢の風景になるのか、そのときこの建築は存在するのか、そんなことを思った。

軽井沢の変わらないもの、変わるもの。考えさせられる見学会だった。梅雨時、人が多くなる前一瞬の季節をねらった好企画を賞賛したい。来年もこの季節に建築を見に行こう。